年礼を一軒ふやす俄か雨

亭主が死んでにぎやかな内になる

からかつた上で三つ組かしてやり

此あばた見つけなんだと中のよさ

それもして見たとおこりはじれて居る

元日の生れ近所で知つて居る

惜しい事色を亭主にして畢ひ

顔へ波打てばらん杭動き出し

土産にもならぬ杓子を旅て買

不首尾な杓子割かへし斗りとり

細つかい癖にあらいは人遣ひ

下り坂車か人を引て行き

（鹿）

（杓子の顔）

（無　題）

あねさまの助太刀で讀む仇打ち

重代の刀なまくら者がまげ

むだよせをして算盤の直を付る

どうだなと戸へよりかゝる日濟貸

かる〳〵と赤子を抱て叱られる

ゆげのたつ男判とりほうり出し

はらさんざ見て供にやる遠目がね

一遍はかさもかきやれとたわけもの

百やすて首をくゝつた店へこし

摺ものて袋戸をはる安隠居

病人をとり寄せて見るはやり醫者

百兩はきえ安いがあばたはきえず

（汗）

通りもの畳は眼に血をそゝぎ
〆出しのやうに朝湯を待て居る
梯子賣まけると屋根へかけてみせ
渡し舟ゆるりと馬の貌をみる
うい奉公内儀の腹に氣がつかず
小便所面目もない人に逢ひ
しわいやつ何んぞといふと時節柄
あいそうも男にすれば疵になり
銀ぎせるあつたら事に手ではたき
新宅の爰もあくかと押して見る
はやくよとばかりは紺屋屁ともせず
油賣まけに大戸を下げて行

子の數をさきへあんじる三世相
凸凹といふ字無筆も感じ入り
逆水の土地に育つてむかふみづ
びんとした酒で願酒の錠が明き
みな色と金だと閻魔帳をくり
借りものを返すと佛樣になり
附け紐て名跡をつぐいぢらしさ
井戸堀は上り家根屋は下りて喰
鷹据へた拳も鳩の杖と化し
菅笠の邪魔に成るまて遊びすぎ
二ケ國にたまつた用の渡り初め
菅笠て犬にもたびのいとま乞い

松原の茶屋はいぶるが景になり
庵の戸へ尋ねましたと書て置き
この小判たつた一晩居てくれろ
蟻ほどにせん疊敷のたゝみさし
四辻へ來ると追人の氣がふえる
醫者の門ほと〳〵打つは只の用
こそぐつて早く受とる遠目がね
金の番とろ〳〵としてうなされる
小間もの屋箱と一所に年が寄り
能い小紋着て紺屋まで引づられ
縫ものを少しよせるも禮義なり
臘燭を消すに男のいきを借り

子を抱けば男にものが言ひ安し
なが噺とんぼのとまる鑓のさき
さやばかりさしてぐる〳〵しばられる
ぶつまねはにぎりこぶしに息をかけ
大神樂あれは下手だとだますなり
無駄足を一日置きに紺屋させ
一人ものやれ茶れをくろ火をくれろ
藪醫者のとくは逃るが目に立たず
一女出世して九族うかむなり
闕取に赤子を抱かせ大笑ひ
歸つたを見れば箒木も恐ろしい
隣の三味に煙草盆叩いてる

變な日にばかり髪結休むなり
呉服店何やら言ふと持て來る
暗闇で晝飯を喰ふ漆掻き
去り狀を書く内質を受けにやり
あら世帶夜具に屏風を立廻し
旅戻り乳母はから手でかけて來る
誰がいふとなしに妾に出たが知れ
米搗を二人とあて米を研ぎ
小兒醫者無駄な脈から取て見せ
隣りとは庇のことて不破の關
骨が折れましたと渡す離縁狀
かげ膳のおろかに成る事が出來

（外より入れば内は暗し）

（密夫）

源氏の繪つまり〳〵は雲で逃げ
竹の子を親に堀らせて喰たがり
歌一首有て咄がけつまずき
龍宮の門番ぐにやり〳〵と出
煩らつて人並に喰ふ信濃もの
今少し是商人の極意なり
笑つたを晩め〳〵通る御立身
不二に別れてから旅に骨が折れ
能い更紗人を茶にした鳥を書き
暗い晩己が假聲通るなり
錐もみは押へた人が吹てやり
井戸堀りに大聲さげてものを言ひ

枕をはづし天の字の酔ひ倒れ
挨拶をうしろへ投るあらひ髪
押へると角兵衛をするはさみ虫
金の字が附くと屏風も借りられる
すつぽんのつく〳〵思ふ放し龜
鼻の先あぶない智恵の置き所
船を漕ぐ鼻へこよりの棹をさし
女房に聞ては流すものは無し
雪隱をうかとあければつんぼが居

（質）

△風流

俳諧の附か又は發句の趣きありて面白き句を掻き集めて見れば左の如し

てのひらで琴を押へる郭公
道問へば一度にうごく田植笠
引き抜た大根で道を教へられ
船の子へ蟹投げてやる蜆取り
人の慾まんなかへ乗る渡し船
乳貰ひは冬の月へも指をさし
門に馬絶ぬが村のはやり醫者
歸りには極樂をゆくいかだ乗
雨やどり筆の無心は品がよし
惜しげなく錦をやぶるいかださし
松に眼をやすめて通るよし野やま
青空の足しない時分ほとゝぎす

こゝろある杣まさかりの花を除け
我が春を二本はのこす小松賣
行く水のなりには漕ぬわたし守
一葉づゝ岸をはなれるやなぎ橋
ゐのしゝに嚏をさせる糸すゝき
面白く笠をとられるつむぢかぜ
朝顔は酒の呑れるはなてなし
「朝顔に我は飯喰ふ男かな」の句より思ひつきしか
樹々染めて寺を寺にはして置ず
雲の帶ほどけて山は眞ッぱだか
かきつばた今盗まれた水の色
河骨の動くを見れば蛙なり

渡し守一棹もどす知た人
掛乞も二三丁ほど春をふみ
手をわけて酒屋たづぬる野掛道
一聲は月に影さすほとゝぎす
春雨に砥石の乾く杣が宿
吸ひつけるうちに流れるわたし守
うぐひすに出て谷汲の郭公

△軍事

降參がすむと一度にひだるがり
伏勢のあぶれはのらり〳〵來る
布呂武者はふくれてみたりしなびたり
正成は鼻をふさひて采を振り

實檢を見て寢そびれる白拍子
かちいくさ向ふて焚た飯を喰ひ
楠はしかけと譽める軍をし

△名代の句

落し噺に引出され又は茶話の種になる古い句を拾ひあげて左に掲ぐ

先生と呼て灰吹きすてさせる
三人で三分なくなる智惠を出し
三分なくなすと言ひ傳へたれど柳樽には失るとあり
泣き〳〵も好い方を取る紀念わけ
泣きながら宜を方を取るとも言ひ傳へたり
ころべとは狼よりも怖ひ親
蝶々のさけを露ほど吸てさし

蝶々の酒を露ほど嫁はなめと作り替たる句もあり
ほころびと子を取かへる獨りもの
くらやみの浴衣後妻ぞつとする
「後妻びつくりし」と作り替たるも有と原句に及ばず
寢る家をむすめころんで引起し
持參金嫁なけなしの鼻にかけ
騒ぐまいものか磨屋の氣が違ひ
江戸者のうまれそこなひ金を貯め
「江戸ッ子の生れ損ひ金をため」と、よく落語の冒歌に使はれる句は柳樽の七編にあり、其中に左の句もあり
店中で知らぬは亭主ばかりなり
「町内で知らぬは亭主ばかりなり」といつも間男騒ぎの關係に出る

奴サ

うれしさは嬉しいけれど下女讀ず
合性はきゝたし年はかくしたし
千疋よりも一疋に嫁こまり
置きつけぬ奴が羽織に紐をつけ
足袋の紐むすべば蜜柑ころげ落
母の名は親父の腕にしなびて居
葬禮を山谷と聞て親父行き
うけ出して見れば畳間の螢なり
親父まだ西より北へゆく氣なり
朝歸り下女おはむきに不人相
孝不孝二つならべるぬりまくら

「孝行と不孝のならぶ塗り枕」とも言ひ、又「孝行に賣られ不幸に請出され」なども通つたものなり
泣くよりも哀れ捨子のわらひ顔
白粉をつけて汚れる後家の顔
石塔の赤い信女がまたはらみ
かみなりのなる時ばかり樣を附

△女護島

風の子と云ふは女護の子供なり
女護の島くさめをすると母を呼

△手長島

鎗つかふ樣に拳打つ手ながが島
立て居て草履を直す手ながが島

△小人島

櫻ン坊太皷のばちに小人島
小人島節句に鮒の幟出し
二分八りんの大刀と小人島
腐草化し人魂と見る小人島
小人島あられに當り非業の死
とこぶしで馬糞を摑ふ小人島

△伊勢物語と徒然草

業平の道樂ばなし本に出來
やは〳〵と重みのかゝる芥川
行きあたりばつたりと出る芥川

色白な剛兵二人出てふせぎ
榎一本に三度まで腹を立て
業平を追ふのだに水いつち逃
在五中將のはれ着はからごろも
仁和寺の化物脉を見てもらひ
筒井筒冷した瓜をのぞいてる
春日の里のかりう人はよい男
二人とは仕立人のない唐ごろも
あくた川越しても先に當が無し
外科へゆく鼎は道の判じもの
容躰を言へば鼎はうなづきて
細腰を尾花のたゝくあくた川

烏帽子着た川越しを見る芥川
豆をとこ衣冠たゞしく不埒をし
あたく川鍋取りめがと追かける
畫ゆけばかまはぬ歌は立田山
なりひら蜆ありさうなあくた川

△忠臣藏

小夜衣やつと分つて腹を立ち
石に精あつてかたまる四十七
菩提所へからだと首が二度に來る
炭部屋でおこつても最う始まらず
餌をかはぬのが鷹の羽の落度なり

親子して四十五人の下知をなし
御主君は一人無刀の御石碑
小便を四十七人せずに居る
手向水一荷て足らぬ泉岳寺
塀の屋根ふわと飛んだは數右衞門
假名手本いの字は京に詫びずま居
一家中手本のほかは反古になり
泉岳寺客を墓所へつれて行き
本所へ隱居をせぬとむつかしい
烏帽子ては手柄にならぬ向ふ疵
寢ぼけたて四百七人ほどに見え
賣られてもやつばりお輕名を替ず

輕石も一つまじつて義をたてる
知れて居るものを數へる泉岳寺
ちりぬるを追な〳〵といの字下知
金を取るまでは親父にどのを附け
一生懸命炭をなげ〳〵
大晦日此處を仕切て斯う攻めて
靜まつて柱の劒をやつと拔き
山科へだつた一軒吹きに行き
引導に四十七時ほどかゝり
醉ひざめへ四十五人が申しわけ
喰たのは蛸喰せたは赤いはし
大石が重荷下した泉岳寺

まだ年もゆかぬに石のちから也
本望さいろはの數に落字無し
椽の下忠と不忠と二人あり
大石は土臺符牒はいろはなり
鹽賣りはよせと大星ふかい智惠
重いのはいの字輕いはすの字なり
居るとこを見たのが竹の吹き納め
吉良びやかなるお寢衣が炭だらけ
本所に二三字京に一字なり
（此句いろはの見立にて忠臣藏に關する趣向と思へど
もし考へ違ひならば御免候へたわい〳〵）
足輕の論吉右衛門平右衛門

九太夫は竈馬などを踏つぶし
赤鰯喰せて蛸は知て喰ひ
ぞろ〳〵と蕎麥屋へ入る四十七

△百人一首

濡て居る衣を傍て乾して居る
九十九は選み一首はかんがへる
百人ながらうぐひすに氣が附ず
深やぶはさすが蚊の出るお歌也
百人へ有明たつた四つ入れ
奈良ざくら一重餘計に匂ふなり

百人で表八句へ四季を入れ
百人首二つにわつておなぐさみ
もろこしで詠だも百の數に入れ
はま荻と伊勢よみさうな所なり
百人首書の出來たのはるか後
ものゝふを止め百人の列に入り
來ぬ人を入れ百人に都合する
かみなりも天狗もまじる百人首
百人で鹿をばたつた二疋飼ひ
喜撰法師の上の句はどころ書き
穴なしと目なし圖なしも百の内
家持をいへもちと讀む大家の子

ころも手のめぐみは重き露と雪

鬼のすむ山をやさしく一首よみ

二階へは膳の出て居る百人一首

ころも干すお歌は流石女帝なり

うぐひすの初音は聞ぬ小倉山

小倉山十萬兩がものを書き

△食客

「居候三杯目にはそつと出し」などは言ずもがな、掛人と言ひ居候と言ひゐる的と云ふ句を、片端より一纏めにして見れば食客を侮辱したる句少からず

烟草まで細末をのむかゝり人

かゝり人せんたくをした飯を喰ひ

かゝり人となりへ腹をたてに行き

かゝり人何をするにも手くらがり

かゝり人芋虫ほどの腹を立て

かゝり人七十五日いきのびず

錢までがたばこの中に居さふらふ

大雪や己も人の子居さうらふ

居さふらふ蟲の居どこの好をとこ

雪隱て齒をみがいてる居さふらふ

居さふらふ一つ巴にころり寢る

猫はあたるに居候ふブウルブル

あん燈の背中をつかふ居候らふ

きんたまがなまなか有て居候らふ
飯ばかり十人なみの居さふらふ
かゝり人小さなこゑて子を叱り
居候ふ拳を敬へて叱られる

△下女

狂句師と中のわるいは下女と居候なり、聞えたる下女の句を左に掲げん

下女が面よく〳〵見れば鼻もあり
下女の腹こゝろ當りが二三人
おきやアがれ下女虫乾を致しやす
叱られた下女膳立のにぎやかさ

糠ぶくろ下女は眼鼻をつかみ寄せ
かたみ分け貰ふ氣で下女やたら泣
あても無く下女ぶら〳〵と戀病
下女の鼻唄臺所のすゝが落ち
花松魚下女はだいなし葉にけづり
言ふ口の下長芋を下女は折り
花道をまごつく下女に落ちがくる
寐忘れた下女はやたらに薪をくべ
三世相下女殊の外苦勞がり
供の下女わらつて通る宿の前
清書にちつと小い下女の文
牡丹餅とぬかしたと下女憤ほり

下女が髪煮染の煮る時分出來　（寶珠）

大笑ひ放屁の玉と下女覺え　（歌留多）

下女手柄百人のくび三つ取り

やなぎ樽下女讀て見て腹を立ち

花むこの顏つく〳〵と下女ながめ

炭の膚をあらはして下女は灸

あばた下女鹿の子斑に塗ちらし

下女つんのめり頤餅と額もち

下女が文二三度立て書き仕舞

燭臺の毛抜きが無いと下女は言ひ

指二本額へあてゝ下女は逃げ

松の内下女塗たとは〳〵

ほとゝぎす下女居眠つたのが知る

土用干し下女あれがいゝこれがいゝ

若旦那さまと書たを下女おとし

風呂敷の結び目へ下女くらひつき

下女が鼻無分別なる置どころ

山の手は下女の目見に井戸を見せ

下女が文假名を楷書に認める

犬柳樽

和らぐと
治るで
世は面白し

寶山人

引こんで居ろと親龜子を叱り
樂屋でもハイ〳〵といふ馬の脚
國元の脉があがつた醫學生
湯上りの氣分で居たし人ごゝろ
雪だるまを死てゐながら目は黑し
勘忍のひゝと一所に緣が切れ
ふんどしの外は借着の居候らふ
東京をのぞくはじめにめがね橋
古屏風裂けてをしどり別れて居
朝歸りまた牽牛花へそれるなり
金をまく人にお世辭を振かける
力士でも母衣蚊張へ寢る小人島

待里庵文一
春立園
喜美廼家
園子
素亭峨升
森の家樵夫
京橋てば大
鳳亭鱗升
花東一佳
福亭滿升
祿亭永升
錦囊寶史

月令にないこと酉が戌になり　好團子
市原野或夜は笛にくまが寄り　鵠亭高升
大晦日乞食ばかりは高枕　翠亭濤升
新聞の社は古いのが面しろし　波亭動升
こめかみへ切張り天窓割れる時　早亭常升
冬が來て質屋のくらは夏となり　岩國臥龍
腐敗して死人ほんとに口が無し　海亭
玉のりをゴム鞠でする小人島　同
あまの川砂漠のやうに見るなり　月の家
遠慮してちゃむ御客に蕎麥が伸　嘉遯坊
蠟燭は風氣ある夜に鼻だらし　同
つまづきの出來るが夢のさめ處　雨亭雲升

相場師は暴風雨の中で舞をまひ　梅亭虬升
一杯のまさむね腹をえぐるなり　鈍々
金が欲いと言ふ口にある金歯　樵亭林升
井戸のそば人の噂がわいて出る　放舍的丸
流車に笛ふかせ按摩がのぼる京　松亭翠升
朝顔はべに猪口になり筆になり　月の家松水
のびる程壽命短かくなるは護謨　伽藍堂無一
夢さめてねむつた親の恩を知り　大坂竹の家
てゝなし子五百羅漢で一思案　好亭宜升
羽二重の肌にちゝめん皺が出來　樵亭林升
順禮か御報しやをするわたし錢　東亭扇升
ブリキ屋のとなりに聾永く住み　同

流行る醫師家では金がうなるなり　雅魔仙人
櫻炭ゆきに焚くのは貧ならず　邪魔仙
阿片吸ふ人をわらつて河豚を喰ふ　鶴遊舍
居のこりに消も入り度行燈部屋　菜塚椎根
老人の貯金紙幣には皺寄らず　愛亭嬌升
大磯のあらし家まで汐を浴ひ　出此坊
庭の松行儀わるいを譽められる　素亭峨升
奥山で海見せるまで世はひらけ　淺草邊人
金貸しの家もあらしに倒される　伽藍堂無一
ティオンで磨くで脛もよく嚙れ　兩窓遊人
不景氣はいづこも同じ秋のくれ　戀亭居升
草刈りの屁は牛の背を轉げ落ち　好亭宜升

西洋のたぬき夜な〳〵腹ラッパ　祥亭餅升
つんぼうは虫籠ばかり矢鱈譽め　春立園
冷飯を喰べて身代暖まり　酒亭主人
產の紐解けば姑の氣もゆるみ　若松大升
木登りの上手な子供落第し　岩國臥龍
稗まきの釣り師は稻の中で釣り　玉亭龍升
夕立に飲食店へひとが降り　板見射利升
大石のゆら〳〵とする七段目　尾道自得庵
書留は晦日のふみと下女思ひ　新宮鏡水
大津繪の鬼もたくめば角が折れ　可愛喃史
其合手つまとは知らず占ない者　哆々子
桀の世は拾ふ可もの捨てなし　待里庵文一

あまりの寒さ水道も口を閉ぢ　　蕩仙

電燈にいのち冥加な火取りむし　　狂

芝居では呼吸を殺して死で居る　　お邪魔の大將

内亂を片眼で見ぬくたまご商　　黑雲亭落雨

借金も萬ほどあれば氣がつよし　　伽藍堂無一

眞ッ直なこゝろで居ても質を曲　　意想雅史

三代目眼じりさがつた子が生れ　　松葉家みどり

泣て來て笑つてもどる乳貰ひ　　黑雲亭落雨

赤はだかとは言ひにくし印度人　　氷亭鯉舛

夕立に跛足浮たり沈んだり　　若松東亭大升

お妾は腕車親は辻ぐるま　　黑雲亭落雨

かへり見ぬ人はうしろの指知ず　　棒腹亭

　　菜塚椎根

蚊いぶしの自慢しながら外へ逃　　島太樓

帽子だけあみだにかぶる宣教師　　眞垣きん花

不孝者親の眼玉の喰逃げし　　岩國臥龍

行先の峠も見ゆる老の坂　　通ひ喃史

三本の足で寫眞機おとものなし　　東亭扇升

ゆきくれて乞食には能い枕橋　　三盃白

千鳥足車夫は二線波畫き　　お曾禮入升

あぶら手の人の爪には火が點り　　翠濤

ひねくれた息子茶人も持あまし　　若松東亭

子孑は赤いインキでかいた文字　　呑助

ほと〻ぎす今鳴たぞと電話掛　　是唐始升

不動さん親父が死んで動き出し　　神戸フヨ亭

ライスカレー汚い飯と下女覺へ　翠山人
もみあげを剃て粹がる青いやつ　魚河岸雲床生
水害の爲に娘は流れの身　羽前氷鯉升
夕立の句が出來ぬうち夏の月　東亭扇升
吸付けて貰つて家を忘れ草　岩國臥流
繁昌な米屋びつこが並んで居　哆々子
盜人は噂をされて影かくす　青森一盃
傾城は笑顏女房は泣きッ面　黑雲亭落雨
傾城に泣れ親父を泣すやつ　前橋素面
葬具屋は泣た門からふくが來る　大坂めさ鷹
下手な書師虎溪三怒の圖を書き　花東一佳
佛檀も光らせて居る兀天窓　若松東亭

舶來であまり感心せぬは米　板見射利升
玄米も都でからだ磨き上げ　波の家ボート

△下女と居候

半日千秋ドンまでを居さふらふ　上田岡亭宿升
下女の腹ふくれ小さくなる旦那　武陽川亭知舟
ほめらるゝ下女口二町手が八丁　可庵否
敬しては遠ざけらるゝ居候らふ　角尾張内曙
歌留多よむ夜計りもてる居候ふ　嘉遯坊
居候らふよんどころなく髯生し　雨の家蛙
三太夫然と居候てきひげはやし　於曾禮入升
居候らふ置き候らふになつた夢　好亭宜升
蟲拳でわるくちを言ふ下女仲間　同

不足有て米の直しらぬ居候らふ　大頭樓扳花
居さふらふ半分水のこほり飲み　寶山人
取り次ぎに坐り往生下女はする　同

△釣と網

さしがねの目盛も荒きくぢら網　可庵否
鯉釣た自まん尾ひれを附て言ひ　遠陽春波
勘忍は太公望のすぐなはり　西野屋濱子
餌の殘りほどこして行く釣仕舞　於曾連入升
大網のさきがいわしの九十九里　上田宿升
釣り落す魚よんどころなき慈善　於曾連入升
魚釣れず百本杭を馬鹿かぞへ　陸奥松里庵
白魚を釣て見たいと子ども言ひ　寶山人

△百の字詠込

眼つかちをかくす花見の百眼　髭のや達摩
文珠の智百ばいましの衆議院　東雲散士
鬼百合もたまにはちすの花の樣　波亭動升
百日紅あめすべらして平氣なり　首尾粹史
鬼百合も姫百合もあるおほ江山　讃岐海亭
五十本くぢき百足はびつこひき　於素禮入升
百合の句をよむ人までも首傾げ　玉の家しかり
雜居して五百羅漢はおやに似ず　粹狂亭一杯

△癡人

子の癡人乞食のおやは自慢をし　禁酒樓主人
群書類聚あきめくらには讀めず　好亭宜升

また一つ重荷背むしの戀やまひ　雨亭雲升

寫眞から啞もよめのくちがあき　成田隱谷子

盲目の旅行トンヂルの味知らず　魯の升也

雜居後はまことの啞が分りかね　戀峨

△釋迦と地藏

釋迦如來山から下りて名が高し　横濱千亭

孔子より三十前に釋迦は立ち　相摸よた坊

石地藏かたいやうでも鼻が無し　横濱ぶたのや

地藏の裁判大岡はおもいやく　南添家草花

釋尊は法の爲めだとはだを脱ぎ　高松春立園

●出放題百吟

日曜の朝だけ天氣豫はうを見　寶山人

いろ〳〵な鞄が留守の門に寄り

スチッキと傘取りかるへ俄あめ

煙草ごと火を借られる馬車の中

氷屋は醫師の後からたゝかれる

高帽子しんぶん紙のたがを箍め

聞た風ビールを下女は振て拔き

珍らしい煙草と譽めて一本取り

船來の空家を借りるサンライス

出來たての指環は指に落つかず

片足であるき自轉車のりならひ
電信の工夫は掏摸のあたまを見
葬式のうちにお禮を組んで居る
號外賣うはさの種をまいて行き
夏帽子なくし汽車賃二度はらひ
支那料理喰ふ吸ふ飲むの忙なさ
店藏にきのふの馬車の燕尾服
立食は天下はれてのつまみ喰ひ
洋食の酒亂はきつと怪我が出來
札を買ふまて上等で汽車を待ち
當人へことづてたのむ電話ぐち
あぶら繪を段々畳める後じさり

寫眞師が一皮剝いたをとこ振り
鉛筆が舌へさはると句が出來る
風邪聲でフロックコート返に來
ハンゲチが鞦韆をする藝妓の手
深張りのかはほりが飛ぶ瀧の水
寐た顏をよく見ないとて叱られる
秋のくれ手拭ひ掛けが鐘を撞き
笑ふ子の瞳にうつる顏ふたつ
おほさかは鐘の銘から寂滅し
眞實の留守は電話てすぐに言ひ
雜居後の芝居かつらの毛も變り
暴風雨の日吹ば飛樣な身は易し

太閤にしやれた綽名は呼ぶ子鳥
結構な食ひつぶしある蠶の宿
人間てさへ白いのは弱いなり
煉瓦ほど紙幣を積んだたかい家
今も尙馬がたゝるは女郎花
申しかね升から印がものを言ひ
松島の頭字隱す朝の霧
小人島はげて藥罐の摘みほと
ほんとうの握飯ならともに無事
朝歸り屠所の羊に馬か附き
吉原の入口らしい二王門
馬鹿な奴フライに望む初松魚

辨慶の手柄ほめ〳〵こぶに睡

△淺草年の市

飲む人はかへつて買ぬ神酒の口
酉よりも又にぎやかな羽根の店
怖くない二人つれ有る仁王門
羽子板と違つて派出な市のうら

△自由廢業

情人の保護もたのむと娼妓言ひ
人權はどんなけんだと娼妓言ひ
まめどんもはやくお逃と娼妓言ひ
廢業の手がみは樂と娼妓言ひ
此の暮れは己が逃ると樓主言ひ

あいつ等もあそぶ癖にと樓主言ひ
此のちはたゞかゝへると樓主言ひ

△時雨

時雨をばはまぐりで知る痴な奴
夕しぐれなどゝ言てはまたも飲み
初時雨外套をこのむいまのさる
會堂の屋根へばら〳〵十が降り
下戸はまたしぐれに菓子を思出し

△大津繪

疝氣もちかと餘は初手思ひ
三指て眞面目に賴む奉加帳
飛だだんまり白旗を犬嗤へ

雷神びつくり足もとへ土左
油は御免と頭の上て大こく
弓は何する積りなのか五郎
龜井戸は其癖見ない娘なり
お若衆の髷へ烏がポタリ糞
首尾がいゝ程尻を出す供奴
水中の鐘は辨慶氣がつかず

△近江八景

義仲曰く左馬の助面目ない
下手な畫師唐崎に畫雨降せ
有平の雁らくがんと名け兼
半鐘は感心しない三井の火事

石山の夏は螢の星月夜
昆沙門が來たら藤太は弱る處
急がば廻れ矢走より蒸溜車
雪が解比良は分らぬ山に成

△藪入好み串團子體

藪入り日　すゝめ屋へ行くかほも見え
顔も見え　ればいゝなアと茶屋の電話
茶屋の電　話で蠶しや屋へくちを掛け
口をかけ　馬鹿しやく八で火をおこし
火を起し　飛んだ釣りともしらぬ渾家
知らぬ妻　手がみのべにがくちを開き
くちを開　鯉がしらせるをとこの子

男の見　じゃう戸のたねのひだり腹
左りばら　ひだりうちはと成るめかけ
成る妾　古ぶつ好きにもかくすむし
かくす蟲　床の美じんの喰はせもの
喰せもの　もつてるなかへ喰ひに行き
くひに行　まつのんだので腹くだし
腹くだし　卯のはなくだし過ぎてから
過てから　及ばぬわびを叔父にする
叔父に爲　禮はおや父のしらぬこと
知ぬこと　知るほどせまくなつた戀
なつた戀　路もはいかいのうらのはう
うらの方　蚊のやうに出るやぶ入り日

狂句の栞終

明治三十五年六月十五日印刷
明治三十五年六月十八日發行

定價金二拾錢

著者 長井總太郎
發行者 大橋新太郎 東京市日本橋區本町三丁目八番地
印刷者 佐久間衛治 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
印刷所 株式會社秀英舍第一工場 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

不許複製

風雅文庫

全部六冊

第一編　都々逸の栞

正價金廿錢
郵稅六錢

天文地理鳥獸虫魚等各部に別ち古今の秀吟を添へ季題と雅題とを親切に說き卷頭には初心の爲めに作法を掲集し卷末には雅題見立物詠込折句其他數百吟を集めたる無比の珍書にして啻に雅俳家のみの重寶にはあらさゝべし。

第二編　冠句の栞　附前句付

正價金廿錢
郵稅六錢

雜俳中の流行物なる冠附、傘附、狂俳等の名は變れども全國に廣く行はる、本書は冠句中別に東京調の名ある一派を初め全國作家の秀吟を網羅し、卷頭には冠附の作例を擧けて初心の爲めに東西を指し、冠附題林中には冠句の題數百を蒐集し、附錄には上句附下句附の佳作を掲げたれば俳諧の參考ともなるべし。

風雅文庫

全部六冊

第三編　狂歌の栞

正價金廿錢
郵稅六錢

天明の昔にありては狂歌の流行は今日の新躰詩の如く甚だ盛なりし四方眞顏錢屋全埒式亭三馬の名人當時狂名を聽かせり明治の今日又た追々熱心家顯はれて昔の俤を見るに至れると賀すべきの至てあるされど初學者の好伴侶となるもの世に稀なるを歎じ鶯亭主人茲に此栞を編せり最初其詠方名家の說を揚け作例を春夏秋冬に分ちて詳かに斯堂の奧窟を指導せられたり

第四編　狂句の栞

正價金廿錢
郵稅六錢

川柳點の惡口と一口に言へど狂句はアラを探す斗りでなく、人情を穿ち教訓の意を含み、言ひ廻しの自在なる雅となく俗となく面白がるる物にて落し咄のまくらに迄引出される程世に廣まりしは柳樽なり、然れども中には巧みに穿がち過ぎて一寸意味の分らぬ句多し、本書は柳樽中の名句を一々丁寧に評して何人と雖も一見して成程と感心する程に委しく意味を說明せり。

風雅文庫

全部六冊

續刊目次

第五編 **狂躰俳句の栞** 正價金廿錢 郵稅金六錢

春夏秋冬の四季に分ち附錄には獨歩行といふを掲け又た狂躰俳句の起り及四季題林などもありて最も趣味多き書冊なり

第六編 **雜俳の栞** 正價金廿錢 郵稅六錢

以上六冊を以て風雅文庫を完成す之を花鳥風月の好友となし淨凡清筵の雅伴とせば其風趣の眞味蓋し窮りなからむ文士たるもの必す此文庫を備へざるべからず。

大和田建樹君編

日本歌謠類聚 上下二冊

正價壹冊六十錢 小包目方四百匁

我邦開闢以來二千五百年間の歌謠は載せて本書にあり時代を以て今古を分ち種類に依て雅俗を別にして一讀人をして昭々其沿革を詳にせしむ大和田先生が之を輯するに幾星霜の勞苦を費されしかは曩に出てたる謠曲通解の一例に於ても推知するを得べし

鶯亭金升君著

都々逸一千題

正價金三拾五錢 郵稅六錢

鶯亭金升君著

情歌題林 **都々逸獨稽古**

正價金貳拾錢 郵稅六錢

長井金升君校訂

俗曲大全

義太夫、一中、河東、富本、新內、薗八、常磐津、清元等の淨瑠璃を始として端唄、祭文、都々逸その他の小唄に至る迄三筋の糸に合せて語るもの、種類を網羅し、古今の歌曲の謠ふものを集めたれば眞に大全の名に背かず文藝に遊ぶもの座右一部を備へざるべからす

全一冊 正價六十錢 郵稅十六錢

俳諧年表

角田竹冷君閲 牧野望東君 星野麥人君 共著

全一冊 和裝菊判

正價金六拾錢　郵税八錢

○本書は延徳元年より明治三十四年に至る迄四百十三年間の俳諧關係の總てを網羅せし年表にして近年稀なる珍書なり

○此書に依り山崎宗鑑が一休和尚に參禪せし以來俳道の出來事俳人の生死、俳書の編述等一目の下に瞭然たり

○俳家、文學家、歴史家必携の書なり

博文館編輯局編（三版）

琴曲獨稽古

正價廿五錢　郵税六錢

世界の風雅國たる日本第一の樂器は實に琴なり神代の昔より尊ばれて普く上下に愛玩せられ風調高邁音韻清妙最も餘情富み和漢諸樂器の調一として之こも應用せざるなし此書は其獨習の秘法を平易に而して補ひ初歩より奥の手まで其順序に由て明解す圖秀才女一本を繙き給はゝ琴曲の妙を得て日夕の雅興特に濃かなるべし

博文館編輯局編

聲曲自在

正價廿五錢　郵税六錢

歌謡聲曲は、啻に咽喉に發達を善くして臓腑を整ふるに止まらず無限の趣味快樂あり語るもの聞くもの共に娯むべし今や酒色の害無益なる遊興は心ある人に捨てられ優美高尚にして兼て有益なる遊戯として漸く時勢に歓迎せらるゝに斯道に志の士本書に由らば師を求むるの苦を要せずして得る所多からん

大和田建樹君編

增補 謡曲通解

全壹冊クロース背皮金字入
賣價壹圓八拾錢　小包六百匁

大和田先生謡曲が文學の紹介者として獨得の手腕を有せらるゝは世人皆知れり今茲に總論を改正し新に幽玄神韻掬すべきもの廿番を加へ全部十卷となし合して壹冊の洋裝堅牢美本として出版す其携帶用に便なると其增補の妙味あるとは購讀者おのずからこれを知らん

發兌元　博文館

佐々木信綱君編

第貳編

竹柏園集

洋装紙皮上製
正價三十五錢
郵税十錢

美しき哉。天に日月星辰あり。麗はしき哉。地に山岳河海あり。人はかゝる美麗天地を見て、所感なきと能はず」。嬉しき事、悲しき事、腹立しき事、恐ろしき事、人事も又複雜なる哉。複雜なる人事に出あいつゝも、人は死物の如く無心なる事能はず。かく物に感じて心たゞならぬ折々、筆に任せて、文字と云者に書きあらはしたるが、我等竹柏會員の歌文にそ、此集はそを集めたるものゝ第二なり。昨年の春世に公にしたる第一集と等しく、之も亦飽かぬふし〳〵の多けれども第三第四第五回目十四回目の後にはやゝ見るべきもの自ら出で來らんか」。理想の的とこしなへに遠く逃げゆかば、我等も亦とこしなへに遠く跡追ひゆかむ。

223
115

087754－000－5

特63－543

狂句の栞

鶯亭　金升／編

M35

DBF－0068